

小説の読み取り方が読後感情の個人差に与える影響について

熊倉 沙彩

我々は読みたい小説を感情や気分によって選ぶ傾向があることから、読後感情を手掛かりに小説選びを支援することが求められている。同じ小説を読んだ場合でも人によって読後感情に違いがあることから、読後感情を手掛かりにした小説選びの支援を適切に行うためには、読後感情に個人差が生まれるプロセスやメカニズムを明らかにする必要がある。読後感情の個人差は小説によって異なり、読後感情が人によって大きく分かれる小説もあれば、皆が同じような読後感情を抱く小説もある。本研究ではこの点に着目し、読後感情に個人差が生まれる原因について検討する。

小説を読む際、我々は登場人物の言動の意図や物語の因果関係について推論しながら読後感情を得ている。そこで、意図や因果関係は同じ小説でも人によって複数の読み取り方がなされる可能性があると考え、「意図性、因果性に関して複数の読み取り方ができる小説では、読後感情に個人差が生まれやすい」という仮説を立てた。また、読後感情に性格が影響を与えるという先行研究があることから、小説の読み取り方と読後感情の関係に読者の性格が関与するかどうかを調べるため、「読者の性格が小説の読み取り方に影響を与え、その結果読み取り方の違いにより読後感情に個人差が生まれる」という仮説を立てた。これら2つの仮説を証明することが本研究の目的である。

仮説を証明するため、5つの小説を対象に意図性、因果性についての読み取り方を調べるための質問と選択肢を作成し、あわせて読者の性格を測定する「主要5因子性格検査」と、読後の感情状態を測定する「多面的感情状態尺度」をもとにした質問からなる調査を行なった。調査対象は筑波大学の学生と大学院生30名である。

第一の仮説を検証するため、小説ごとに読み取り方のばらつきと読後感情のばらつきを求めそれらの間の相関を求めた。結果は、有意な相関は認められなかったものの0.7以上の高い相関係数の値が得られた。小説の数を増やすことで第一の仮説を立証できる可能性が示唆された。第二の仮説を検証するため、まずそれぞれの小説について読者の性格因子と読み取り方の相関比を求めた。一部の小説について性格因子と読み取り方の間にやや弱い相関がみられ、性格因子と読み取り方の関連が示唆された。次にそれぞれの小説について読者の性格因子と読後感情因子の相関を調べたところ、複数の有意な相関が認められた。

結論として、小説の読み取り方の違いが読後感情に影響する可能性があることが示され、さらに読者の性格が読み取り方に影響を及ぼすことにより読後感情に個人差が生まれる可能性が部分的に示された。

(指導教員 中山伸一)